

氏 名 : 二宮 祐子  
専攻分野の名称 : 博士 (教育学)  
学位記番号 : 博甲第 233 号  
学位授与年月日 : 平成 26 年 3 月 14 日  
学位授与の要件 : 学位規則第 4 条第 1 項該当 課程博士  
学位論文名 : ナラティブ・アプローチの方法論に関する実証的研究  
—保育実践を対象として  
論文審査委員 : (主査) 教授 野口 裕二  
(副査) 教授 橋本 美保 教授 高田 滋  
教授 大友 秀明 教授 井上 果子

## 学位論文要旨

本研究は、保育実践を調査対象として、保育の世界を物語的に構成する相互作用プロセスを明らかにしながら、ナラティブ・アプローチの研究方法上の可能性を追究することを研究目的とする。これまでナラティブ・アプローチでは、定型性・創発性・再帰性といったナラティブ特有の性質に注目し、これを活用することで、様々な知見が蓄積されてきた。ただし、以下の 4 つの理由により、従来の社会学における実証的研究は、方法論的に不十分であったと考えられる。

まず、ナラティブ内部の構造的特徴が注目された反面、相互作用の側面は十分に検討されてこなかった。次に、ナラティブはセンテンスや出来事を単位として計量的に把握することが可能であるにもかかわらず、量的な分析手法が十分に生かされてこなかったために、研究者自身の解釈に過度に依存しがちで、実証性を欠く恐れもあった。さらに、話し言葉や書き言葉を習得した人々のフィールドを調査対象としてきたため、テキスト・データが偏重されがちであった。同様の事情により、「物語」として組織化されていない未分化状態のナラティブも見落とされがちであった。

そこで、人々の相互作用プロセスの中でナラティブの諸機能がどのように作用するかという分析観点に依拠しつつ、混合研究法を採用し、ナラティブ的要素を含んだ身体動作や絵画などテキスト以外のデータ、および、「物語」形式以外のナラティブも調査対象に含めた。このような研究方法論上の精錬にふさわしいフィールドとして、保育実践を選択した。言葉が十分ではない保育現場でなされる援助的コミュニケーションだからこそ、ナラティブの諸機能が浮かび上がると想定されるからである。本研究では、以下の 4 つの調査を通じて、保育者による援助プロセスを明らかにしつつ、ナラティブ・アプローチの新たな可能性を探究した。

第 2 章では、連絡帳での保育者—保護者間のやりとりを題材に、子どもをめぐる出来事の記述をめぐって、保護者から高い信頼を付与されたクラスと、そうではないクラスを比較した。その結果、記述量とは関係なく、発達の観点に依拠しつつ保護者側の記述に関連づけながらエピソード記述を行う保育者に対し、保護者が高い信頼を表明する傾向が見出された。

第 3 章では、生活画制作を題材に、保育者と子どもとのマンツーマンの会話の中で、2 歳児や 4 歳児による物語り行為への援助プロセスを検討した。その結果、保育者は年齢や状況に応じて、5

つの「ナラティブ・ストラテジー」を使用していることが見出された。2歳児には出来事を記述した文を誘発するような聴き方を行い、4歳児には出来事に対する解釈を誘発するような聴き方をする傾向があった。

第4章では、年長組の自由遊びあるいはクラス活動としての描画制作場面を題材として、保育者による援助と、「ナラティブ様式の認識」の発現として位置づけられる「基底線表現」の出現との関連性について検討した。クラス全体での討議の中で、保育者が、子ども達の語る一つ一つの出来事を拾い上げ、クラスの思い出としてまとめあげるよう援助をした場合、そうでない場合に比べ、「基底線表現」が出現する傾向があることが分かった。

第5章では、年長組における発表会にむけた創作劇のもとになる物語の制作プロセスを「ナラティブ・エスノグラフィー」により検討した。大人の援助なしには、第3者が客観的に理解できる物語を完成させることは難しいとされる発達レベルにある子ども達が、それぞれのアイデアやイメージを表現し、クラス全体で討議しながら、一つのストーリーとしてまとめ上げていくプロセスにおいて、保育者がどのような援助をしているのか観察した。その結果、保育者は、子ども達による物語創作が促されるような「ナラティブ環境」を設定した上で、環境内の相互作用を活性化させるために様々な働きかけをしていることが明らかとなった。

以上より、本研究の方法論上の貢献は、次の四点にまとめられる。第一に、援助的な相互作用の成立／維持のために用いられた様々な「ナラティブ・ストラテジー」や「ナラティブ環境」が明らかにされた。第二に、混合研究法を採用することにより、研究者の主観的解釈に過度に依存しない分析手続きを開発した。第三に、ナラティブ分析を改良しただけでなく、これまで方法論的な提案にとどまっていた「ナラティブ・エスノグラフィー」の実証研究を実施することで、非言語的データも検討対象に取り入れた。第四に、萌芽的なナラティブが「物語」へと組織化されていくプロセスに光を当てることができた。

また、実践上の貢献として、保育者による様々な援助プロセスの相互作用的特徴やナラティブ的性質が明らかになった。保育学・幼児教育学・児童福祉学において、保育実践について議論をすすめる上での一つの有効な視点になりうると思われる。